

巻頭言

本書、『続土佐の地名を歩く』は地域資料叢書18として刊行される。その巻頭のことばを執筆させていただけることは、まことに光栄である。

本書は土佐の地名をはじめとした文化遺産の発掘・保護・顕彰につとめておられるグループで、ホームページ『四万十町地名辞典』を主宰する「奥四万十山の暮らし調査団」による2冊目の報告書である。前巻『地域資料叢書17 土佐の地名を歩く』に続く本書は「第1章 旅行記を歩く」「第2章 古地図を歩く」「第3章 峠を歩く」の3章構成で、計5本の論考が収録される。

第1章は、江戸中期の旅行記『土佐一覽記』をもとに旅を追体験し、平成の『土佐一覽記』を体感しようとするものである。キーワードには、且過・布施屋・善根宿、算所やしき、頭陀、物乞い、鷹ノ巣、塩の道、馬借など歴史学、社会史からの観点でも極めて興味深い単語が並ぶ。そのいくつかは明らかに今日の景観に連続している。すこぶる魅力がある。

第2章では、『弘岡井筋絵図』に記された小田の井流（ユル）、木材を落とす装置である「新川の落とし」、西分の切抜・唐音の切抜などの遺構を現地で確認していく論考が収録されている。コンクリート化で詳細が不明になりつつある用水施設に関する追跡調査で、水の不足に苦しんだ先人たちの労苦をしのぶ追体験である。「新川の落とし」については模型を復元作成し、古老からの聞き取り調査を徹底し、実際に木落が行われていた昭和20年代の運用が再現される。聞き取りの機会としては最後に近かったのであろう。戦前の合併前の旧町村役場跡の現地比定も、古地図と文献、聞き取りを組み合わせ足でかせいだ労作である。

第3章には、「上山郷給人目録」を基礎史料に、『長宗我部地検帳』（以下『地検帳』）や神社棟札も併用しながら、近世初期の上山郷の上山氏の在地支配を村単位で明らかにし、経済基盤である山林の経営を担う山間領主層の存在を浮かび上がらせている。『地検帳』記載のホノギや住人の性格から、上山氏傘下の森野氏が、鍛冶、番匠、筏乗を管理して木材の切り出しと材木を四万十川河口部へ流す流通を掌握していた様子を巧みに復元している。

また、佐賀越の古道の民俗誌も記録されている。慶長2（1597）年の『地検帳』には「宇津井川村」とある「打井川村」の調査。現在残る屋号は、『地検帳』記載の屋号とは一致しないとのことである。この山間の村にも「潮水」取りや、「塩の宿」「塩迎え」「さか迎え」という言葉があり、海・海岸との交流があった。「さか迎え」などは古語のように思われる。田辺湛増伝説、権現の休み石、「熊乃屋」、熊野浦（地名）など、はるかな熊野信仰が定着していた地域でもあった。著者は峠道を介して山村―農村―海村―都市がつながる「海山経済圏」を想定し、過去の繁栄を見る。木炭も硝煙（煙硝）もその生産は明らかに都市との交易目的である。硝煙はどのようにして、どの程度生産ができたのだろうか。調査団には、熊野神社大祭で行われた潮汲みを再現する計画があるという。再現を通じて失われた歴史も復活再生することであろう。

なお前巻『土佐の地名を歩く』でも書かせていただいたが、地域資料叢書はわたしが九州大学に勤務していた時に、院生たちの研究成果発表の場所が必要であると考えて始めたものである。とりわけ現地調査の結果を報告するうえで必要ではあるが、印刷経費がかかりすぎるために掲載されにくい地図などが十分に収録できる報告書を考えて。その叢書が、わたしが九州大学を定年で去った後にも、大学OBとなった楠瀬さんらに受け継がれている。まことにありがたいことである。

くまもと歴史・文学館館長 服部 英雄